令和５年度研究協議会テーマ２

地域資源の価値共有による地域創生を目指して
―信州 知の連携フォーラムの取組

県立長野図書館長
森 いづみ

１．はじめに

「信州 知の連携フォーラム」(以下､「フォーラム」)は、平成28（2016）年に長野県の３つの文化施設（歴史館、美術館、図書館）と、信州大学附属図書館の４者でスタートした。「信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通して地域住民の学びを豊かにし、地域創生につなげていく」という目的で､(1) 電子情報の共有化と新たな発信の展開､(2)（1）に伴う新たな人材育成の２つの方向性を掲げている[1]。

（1）に関しては、先行する取組として平成22（2010）年に構築された「信州デジくら」があったが、財源の関係でコンテンツの拡充が難しい状況となっていた。これを打破しようと提唱されたのが､「信州 知のプラットフォーム構想」である。情報システム基盤を県立図書館が持つことで、他の機関はコンテンツ作成や活用に注力でき、トータルコストを下げながら豊かな共有財を育てられるというメリットがある。令和２（2020）年４月、後継となる「信州デジタルコモンズ」を含む、地域情報のポータルサイト「信州ナレッジスクエア」が始まった。折しも、コロナ禍による休館要請が出され、来館利用の機能が失われた時の苦悩は記憶に新しい。６月には、共同メッセージ「過去・現在を未来へと架橋する「知のインフラ」を考えていくために」を発出し､「信州ナレッジスクエア」の活用を呼びかけた。

（2）の人材育成は、年１回イベントを開催している。２回目までは各機関が事例を報告し、ディスカッションを行った。一般に、図書館が扱う資料の持つ「メッセージ」は、実体である「キャリヤー」が異なっても伝えられることが多い。しかし博物館・美術館が扱うモノは、「メッセージ」と「キャリヤー」を切り離すことが難しい。モノに対する意識の違いにより、デジタル化やネットワークでの提供に対する温度差は大きかった。この差異を乗り越えるべく、「我々は、何のために・誰のために存在しているのか」という本質に立ち返り、相互理解を進めるためワークショップを開催することとなった。

２．お互いを知るためのリレー式ワークショップ

「フォーラム」第３回（平成31（2019）年）は信州大学の当番で、お寺のMLAを体験した。お寺には仏像や仏具といったモノ、曼荼羅などの絵、お経やお祈りの作法の本、お寺に関するさまざまな文書がある。これらを寄託する場合、モノは博物館、本は図書館、文書は文書館に分かれるかもしれないが、本来の姿は一体であることを、実感をもって知ることができた。第４回（令和２年）は県立図書館が当番で、「信州ナレッジスクエア」のお披露目と、著作権処理など実務的な課題について話し合った。地域からの発信がインターネットの民主化につながるという話が出たのが印象的だった。第５回（令和３（2021）年）は県立歴史館の当番で、本物の土器を触らせていただき、若い世代向けの古文書を読み解く講座や、遠方で来てもらいづらい学校への「お出かけ歴史館」等、実践的な話をしていただいた。第６回（令和４（2022）年）は県立美術館が当番で、下諏訪町出身の芸術家「松澤宥」のデジタルアーカイブを「信州デジタルコモンズ」で構築する計画や、資料の整理のプロセスについて学ぶ機会となった。第７回（令和５（2023）年）は、リレー式ワークショップが２巡目に入り、信州大学の当番で開催された。作製から100年以上も経過した明治・大正期の雷鳥（ニホンライチョウ）の剥製から遺伝子解析をしたり、採集した研究者のノートを分析したりといった、総合大学ならではの「文理融合」型のコラボレーションが進んでいるという報告があった。そして、技術的な対応や財源確保の難しさ、息の長い活動の必要性が提示された。初回からの発表資料やフォーラムの報告は、信州大学の機関リポジトリで公開されている。

改正博物館法に、デジタルアーカイブや「地域の多様な主体との連携・協力で、地域の活力の向上に取り組む」ことが盛り込まれたことを受け、関係者打ち合わせでは、従来の２つの方向性を継承していくことが改めて確認された。

３．デジタルを組み合わせた「体験」から始まる学びのアプローチ

デジタルによる連携によって、どんな効果が期待できるだろうか。まず目録情報の共有化・横断検索の実現によって、所蔵資料の存在を知ってもらいやすくなる。電子化・公開が進めば、さまざまな付加価値サービスが可能になり、現物の閲覧を必要最小限に抑えることもできる。モノ中心から学習者・利用者中心への発想の転換が、結局は現物を守り、継承することにも有効なのではないか。令和６（2024）年２月に石川県立図書館で開催されたパネルディスカッションの際、「すでに現物がなくなってしまったものも、アーカイブ化できますか？」という質問をいただき、はっとさせられた。現物そのもの、風景そのものが失われるお

それがあることへの視座をも、持たなければならないと痛感した。保全／利用、来館／非来館、フィジカル／デジタルといった二項対立ではなく、相乗効果の道を探ることが必要だ。デジタルの強みを生かせば、物理的な空間や時間、組織の壁を越えることが容易になるだろう。

東京国立博物館の特別展示「やまと絵」を観覧した際のことである。「四季草花小禽図屏風」の絵葉書を買いたいと思ったが、残念ながら商品化されていなかった。ところが、ネットで検索すると「国立文化財機構所蔵品統合検索システム：ColBase」で画像が公開され、ダウンロードして二次利用できるという。「絵葉書も良いですが、ミニチュア屏風製作も楽しいかもしれません」とコメントをいただき、腑に落ちた。好きな絵を選び、本で表具の仕方を学び、作ってみる講座もできそうだ。参加した人が、「本物を見たい」と次の行動に結びつく可能性もある。図書館でも、「読みなさい」から始まるのはつまらない。体験して面白くなって、もっと知りたくなったら「読みたくなる」。大人も子どもも、「体験」から始まる学びのアプローチが大切なのではないだろうか。

４．活用の拡がりと今後の課題

駒ケ根市東伊那公民館では、区誌『峯高く』の編さんが進んでいる。広報に応じて、情報提供をしてくださる方が増えたという。博物館への寄託や文化財登録がされていない、個人のお宅で大切に保存されてきた古文書の存在を申し出てくださったそうだ。古文書の全文をすべて区誌に掲載することは難しい。しかしデジタルアーカイブに搭載し、冊子から二次元コードでリンクすれば、より広く深い知の世界につなげることができる。「信州デジタルコモンズ」の新たな活用例として、嬉しい展開となった。「信州デジタルコモンズ」は「地域の記憶を記録する―知の共有地」を標榜し、公的機関以外の地域資料も登録対象としている。個人や民間の場合は公的機関と組んで申請していただくよう、規程[2]を定めている。

システム基盤を各自治体が持つのは予算や人的体制などのハードルが高い。このため、当館ではシステム基盤の提供に加えて、万が一継続が難しくなった場合セーフティネットとすることも想定している。情報と情報を確実につなげるためには、IDが重要だ。例えば、前述の区誌のような活用方法でリンク切れは致命的だが、実際に「信州デジくら」から「信州デジタルコモンズ」への移行でURLは変わってしまった。今後、観光アプリでの活用など、多様な活用が期待される中で信頼性を高めるためにも、リンク切れを起こさない仕組は必須だろう。「デジタルアーカイブ活動のためのガイドライン」[3]（令和５年９月）は、持続可能性を担保したデータ管理の手段として、国際標準規格のDOI（Digital Object Identifier）を推奨している。日本ではジャパンリンクセンター[4]が運営を担い、国立国会図書館のデジタルコレクションのほか、学協会は科学技術振興機構、大学図書館の機関リポジトリは国立情報学研究所が正会員（とりまとめ機関）となり、DOIを付与している。ところが自治体のデジタルアーカイブは、必要性があまり議論されておらず、例外を除いて付与されていない。真に文化資源を継承・発信していくために、データのバックアップ、万が一デジタルアーカイブが失われてしまった時にデータを公開する、いわゆるダークアーカイブの仕組なども含めて、国家レベルの検討が必要ではないだろうか。

５．地域資源の価値共有による地域創生を目指して

令和５年８月、次世代型文化施設フォーラムによる「博物館・図書館等を基盤とした地域文化資源の保全と活用をうながす政策提言―文化資源の「地域包括シェア」による地域づくり（ver.2）」[5]（以下、「提言」）を受け、「フォーラム」をもっとみんなが関わりやすい枠組みにしようという機運が高まった。令和６年２月、MLAに大学（U）や企業（I）、地域コミュニティ（C）、公民館（K）、学校（S）、劇場（T）も加えた、みんなの「MALUTICKS連携」に向けた新しいミッションステートメント[6]を発出した。県内の地域資源に関わるすべてのステークホルダーが協働する姿を理想像として描いている。

信州のさまざまな情報が蓄積・活用され、その成果がまた蓄積されていくという「知の循環サイクル」を全県的に創り出し、人々の活動成果や暮らしが蓄積され続ける文化を醸成したい。そのためには、「提言」でも言及された、地域の「文化資源コーディネータ」のような存在が必要不可欠なのではないかと考えている。「フォーラム」の試みの根底には、『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか』[7]という普遍的な命題がある。地域に根差す図書館として、これからも県内外の志を同じくする人々と協働し、過去・現在を未来につないでいきたい。

（もり・いづみ）

1　https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/now/mezasukoto/torikumi/mlaforum.html
2　https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/portal/guide.html
3　https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/digitalarchive_suisiniinkai/jitumusya/dai16/siryou１-1.pdf
4　https://japanlinkcenter.org/top/
5　https://sites.google.com/view/jisedaiforum/
6　https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/now/news/osirase_240201_2.html
7　ポール・ゴーギャンの絵画のタイトルより
※アクセス確認日：2024年４月11日